

図-13 主要部における変位の時刻歴応答図

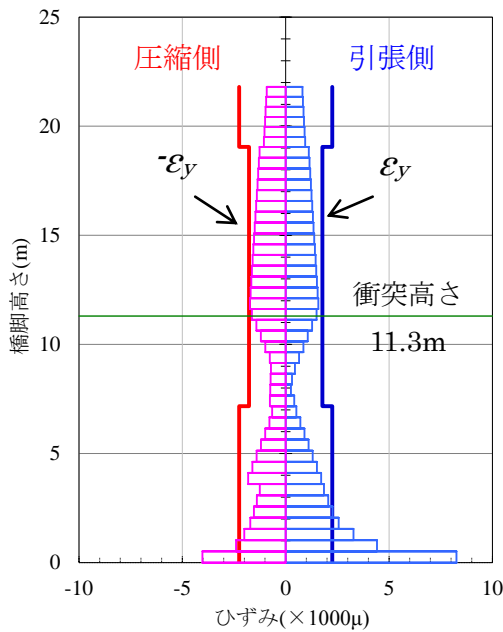


図-14 高さ方向の最大ひずみ分布図 (P1 橋脚)

程度はそれ程大きくなく、破壊状態に至るような損傷が生じないことがわかった。船舶と橋脚の衝突箇所については、接触部にて大ひずみが生じる

ことが予想されるが、3-4 で述べたように本検討では局部座屈を再現できる解析手法を用いていないために、衝突箇所において大きなひずみが生じなかったと考えられる。

おわりに

本検討では、南海トラフ地震発生後に生じる津波により最大級規模の大きさの船舶が漂流するとともに、その漂流船舶が神戸港東エリアに位置する六甲アイランド大橋に衝突することを想定した、船舶と橋梁の衝突解析を行った。津波伝播解析により六甲アイランド大橋に衝突する船舶の衝突速度と衝突位置を求めた後に、船舶-橋梁衝突解析を行うことで船舶の衝突が六甲アイランド大橋に与える影響について検証した。これら解析による検討の結果、船舶が衝突する橋脚の基部において大きな損傷が生じるが、破壊状態に至るような甚大な損傷は生じないことが明らかとなった。

本検討における衝突解析では、衝突力の設定を

